

ちらちらと白い粒が風の中に混じっていた。

そんな寒空の下、俺——野見山照市は玄関先の草取りをしていた。冬枯れした雑草を抜くたびに、濃い土の匂いがプンと鼻をつく。

「……そろそろ止めるか」

かつては広大な畑を耕し、休みなく働いたが、もう遙か昔の話だ。今、俺の手元にあるのはガタついた身体と家だけ。長年ついてきた妻の春江も三年前に他界した。

服についた土を払った俺は家へを戻り、茶の間の炬燵のスイッチを入れる。ついでにテレビも点けた。ワイドショーの派手な音楽が静まり返った部屋に響く。

狭い茶の間の半分はベッドが占拠していて、更にはもう半分は炬燵が占めている。俺は炬燵に入って、あまり興味の湧かないテレビ番組を見た。

時刻は昼前になっている。とは言っても腹は特に減っていない。最近、食に対して興味が減っている。歯も悪いし、免許を返納した今では買い物も一苦労だからだ。

と、その時、チャイムが鳴った。

「はいはい……」

我が家を訪ねてくるなんて珍しい。

俺はベッドから起き、痛む腰を押えながら寒い廊下を歩いて玄関に向かう。

玄関を開けると、宅配便の運転手が発泡スチロールの箱を抱えて立っていた。サインをして箱を受け取り、台所まで運ぶ。差出人は娘の美咲だった。

美咲は三人いる娘の末っ子で今は佐賀に住んでいる。上の二人——和江と良子は県内に住んではいるが結婚して育児や仕事で忙しいようで、あまり連絡を取っていない。

「一体何を送ってきたんだ？」

箱を開けると、中には豆腐とペットボトルに入った透明な水、そして、ポン酢の入ったパックが綺麗に収まっていた。パッケージには『温泉湯豆腐』と書かれている。

一人で湯豆腐か……。何となく寂しさを感じて、箱の蓋を開めようとした時、一枚の便箋が挟まっていることに気付いた。

『お父さん、たまにはあったかいもの食べてね。湯豆腐身体にいいから』

たったそれだけだったが、美咲の字を読んで心が温かくなると同時に腹が減った気がした。

俺は冷蔵庫を開けると、おあつらえ向きに白菜と椎茸、人参、ネギがあった。多少しなびてはいるが、まさにこの瞬間を待っていたかの様にも思えた。

次に棚から土鍋を引っ張り出す。縁に小さな欠けがある。昔、春江が落とした時のままだ。

温泉湯豆腐の説明書を読むと、どうやらペットボトルの中の温泉水で具材を煮込めば良いとのことだ。俺は豆腐や野菜を切り、温泉水と共に鍋に入れて火にかける。

本来、湯豆腐は先に豆腐を楽しんで、その後他の食材を入れるらしいのだが、正直面倒だった。もはや見た目は完全に鍋みたくなってきたが徐々に楽しくなってきた。

沸き立つ湯の中で、豆腐のが柔らかくほぐれ、湯に淡く溶け出す。どうやら温泉水の成分で豆腐が崩れていくらしい。

食べごろだ。

俺は火を落とし、茶の間の炬燵の上に鍋を持っていった。

湯気が、頬や鼻を、そして部屋の中をやわらかく温める。

鍋の豆腐は、更に柔らかくなっていて、もはや箸で持ち上げることが不可能だ。俺は豆腐をレンジですくい、ポン酢にくぐらせて口に入れる。

――ふわり。

舌の上でほけると同時に、素朴な旨みが鼻を抜けた。噛むというより、吸い込むように飲み込むと、喉の奥からじわりと熱が広がっていく。

その時、良いことを思いついて、慌てて台所に戻った。

俺は野菜室の奥底から日本酒を掘り起こした。これは以前、上の娘の和江が買ってきてくれたものだ。そして、棚から一つの切子グラスを取り出す。これは二番目の娘、良子が遙か昔に誕生日でくれたものだ。

茶の間に戻った俺は日本酒を切子に注ぐ。部屋が温かくなっていたからか、既に切子の表面がしつとりと汗をかいている。

再度、湯豆腐を一口食べ、切子の表面の透明な液面をひと口含む。

米の甘みと柔らかな酸味が舌の奥をくすぐり、喉を過ぎて胸の奥を温める。

「……やっぱり、いいな」

酒と湯豆腐。互いの熱を引き立て合いながら胃を、心を満たしていく。

出汁とポン酢の優しい味が身体にしみ込んでいくのが分かる。

酒をまたひと口。湯豆腐のやさしい塩気が、酒の甘みをさらに深くする。

その味わいに浸っていると、ふと湯気の向こうにエプロン姿の春江が立っていた。あの頃と同じく、笑顔でこちらの方を見つめていて――

「……あ？」

ふと、瞬きをすると、そこには誰もいなかった。

首を傾げ、ふと時刻を見ると一時間ほど時が経っていることに気付いた。どうやらうたた寝していたようだ。目の前の鍋の中はもう空で、日本酒も全て無くなっている。

確かに腹は膨れているが、自分が全てを平らげたとは思えなかった。

俺は不思議に思ったが、身体と心がすっかり温まっていることは違いない。

「美味かったな」

何となく久しぶりに家族が揃った様な気がして、俺は一人呟いた。

そして、美咲に札を言おうと電話機を取った。

窓の外は雪が静かに降り始めていた。しかし、今は湯気と酒の温もりが俺をやさしく包み込んでいた。